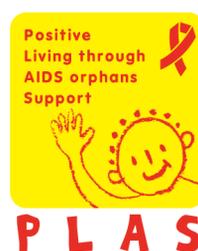


特定非営利活動法人
エイズ孤児支援N G O ・ P L A S

事業・決算報告書

2 0 1 6 年度

2 0 1 5 年1 0 月1 日 - 2 0 1 6 年9 月3 0 日





Our Mission

HIV/エイズによって影響を受ける子どもたちが未来を切り拓ける社会を実現する

Our Value

わたしたちが大切にすること

1. 地域で子ども達が育つことを大切にします
2. 地域と共に活動し、住民の自立を優先します
3. 前向きにチャレンジし、成長しつづけます
4. 人とのつながりを大切にし、お互いを尊重します

Contents

1. Our Mission, Our Value
2. プラス設立10周年の御礼とご報告
3. 2016年度を振り返って
4. 海外事業 ケニア
5. 海外事業 ウガンダ
6. 国内事業 世界エイズ孤児デーキャンペーン
7. 国内事業 世界エイズデーキャンペーン
8. 国内事業 主催イベント、助成金実績、主なメディア掲載
9. 会計報告



プラス設立10周年を迎えました



代表理事
門田瑠衣子

2005年12月にプラスを設立して、あっという間に10年がたちました。10年前に支援を開始した子どもが大人になり、手紙をくれました。出会ったときは、学校に行けず、差別や偏見に苦しみ、目を合わせて話すことさえできない子でした。『みなさんのおかげで、たくさんの夢がかない、いま幸せに暮らしています。』という言葉と共に、赤ちゃんを夫婦が囲む、笑顔の家族写真が添えられていました。

こうした変化を生むことができたのは、日ごろから活動を応援してくださっている支援者の皆様、企業の皆様や、ともに活動するスタッフ、ボランティアの皆さんのおかげです。心より御礼申し上げます。これからも、子どもたちが未来を切り開いていけるよう、活動を続けてまいります。これからの10年も、応援のほど、どうぞよろしくお願い致します。

10周年おめでとうございます。プラスとケニアのウゲニャ県で実施したHIV母子感染予防事業をよく覚えています。同様の事業は沢山ありますが、プラスは他の組織とは異なり、地域の人々の考え方をよく知ることで、地域の課題とその解決策を見出しました。この事業でエイズと母子感染予防を啓発する50名のリーダーを育成し、啓発活動を行いました。住民は健康を意識し、母子感染を自分事として捉えるようになり、恐怖を感じずにHIVサービスにアクセスできるようになりました。日本の支援者の皆さんのこれまでの貢献とその温かい心に、心より感謝します。



現地パートナー団体
SWAK NYANZA
Tobias Ogoiさん

10年間の実績

育成したエイズ予防啓発リーダー

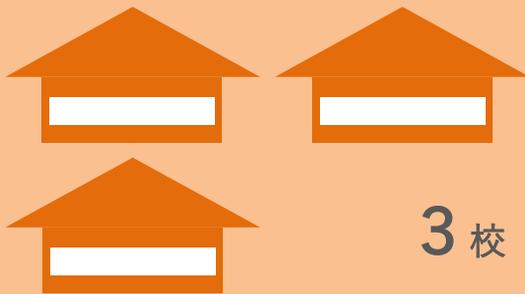


64名

エイズ予防教育を届けた地域住民



支援した小学校



3校

学校に通えるようになった子ども



370名

10周年記念パーティーを開催



8月28日、これまで支えてきて下さった皆様へ感謝をお伝えする10周年記念パーティーを開催し、79名の方にご来場いただきました。設立メンバーのトークでは、人脈も資金も経験もなくゼロから活動を続けてきた原動力や、現地で生まれた変化、次の10年の抱負をお話しました。皆様のご支援、応援で活動を続けることができたこと改めて実感しました。後半はプラスを長年応援いただいている土屋アンナさんと理事の一宮のトーク。「チャリティ活動は転んでいる子どもを助けることと同じ自然なこと。自分ができることをするだけ」という言葉が皆様の胸に響きました。

開催にあたり12名の一般ボランティア・企業ボランティア・プロボノの皆様、4名のインターンに支えていただきました。次の10年も、ご支援者やボランティアの皆様、企業の皆様をはじめ多くの方たちと共に課題の解決に向かっていきます。ご参加いただいた皆様からは、「日本からできることを長いスパンをかけて続けていきたいです」「プラスに関わる様々な方のお話を聞くことで、自分も日々チャレンジしていきたいと思いました」という感想をいただきました。今後もプラスの団体名の由来でもある「Positive Living（前向きに生きる）」を胸に刻みながら活動を続けてまいります。



2016年度の御礼と活動を振り返って



事務局長理事
小島 美緒

いつもプラスをご支援・応援いただきましてありがとうございます。
2016年度は「変化」の年でした。ケニアで新たに2つの現地NGOとパートナーシップを結び、ウガンダでは新事業がスタート。「HIV/エイズに影響を受ける子どもたちが未来を切り拓ける社会」を目指し、パートナー団体と活動を進めてまいりました。国内では代表・事務局長が産育休に入り、限られた人員での運営に挑戦。残念ながら当初予算は達成できず、現地の事業にこそ影響はなかったものの、財務基盤の強化が来年度の課題です。2017年度は、変化する国際潮流や地域のニーズの中で、プラスのミッション・ビジョンを見つめなおし、パートナー団体とともに課題解決に取り組むための中期計画を描く1年となります。
アフリカに伝わる諺に「早く行きたければ一人で行きなさい。遠くまで行きたければ、皆で行きなさい。」というものがあります。11年目を迎えたプラスですが、私達だけでは実現したい社会に辿りつけません。日本から様々な形で支えて下さる皆様の存在あってこそです。次の10年も、プラスが取り組む課題を解決するための大切な「仲間」として、共に歩んでいただきますようお願い申し上げます。



理事
一宮 暢彦

プラスの活動は2016年度で10年を迎えることができました。
私が初めてケニアの事業地に足を踏み入れて、そこで会った10歳前後の子どもたちがもう立派な大人になっている年月が経っていると思うと感慨深いです。
10年活動を続けてくることができたということは、設立当初からプラスへの支援と協力の広がりや積み重ねを感じる事実となりますが、一方で未だに問題が続いているということでもあります。今年度は、現地でのプロジェクトのさらなる飛躍のための新たな課題の設定と種まきができた年だったと思います。
11年目を迎える来期も団体名の由来である“Positive Living with AIDS Orphan Support”のマインドを忘れず、今まで以上に活動に関わる全ての方々が前向きに活動に関わることができ、ミッション達成に向かっていけるようなかたちを作っていくように努めて参ります。

なぜ「エイズ孤児」を支援しているのか

わたしたちとエイズ孤児との出会いは2005年にさかのぼります。当時学生だったわたしたちはボランティア活動で訪れたアフリカでエイズ孤児の存在を知ることになります。お父さんとお母さんをエイズで亡くし、親戚に引き取られながらも、学校に通うことを許されず、差別を受けて生きているまだ10歳にも満たない子どもたちがそこにはいました。

当時、アフリカの一般的な住民がエイズ治療薬を受け取るとはまだまだ難しく、ケニアやウガンダでもそれぞれ年間10万人近い人々がエイズで亡くなっていました。エイズは「死の病気」と恐れられ、エイズ患者やHIVに感染した人々が差別をされて暮らさなければならない状況でした。親をエイズで亡くした子どもたちは行く場所がなく、やっとたどり着いた親戚の家でも、エイズの親の子どもという理由で簡単には受け入れてもらえない状況でした。

「学校に行きたい。友達がほしい。」

この頃に出会ったエイズ孤児の一人がわたしたちにそっと伝えてくれた言葉です。親をエイズで亡くした子どもたちでも学校に通えるという当たり前の環境を作りたい。そんな思いとともにわたしたちはエイズ孤児を支援してきました。

2000年代後半には、アフリカでエイズ治療薬が普及したことで、エイズを原因に亡くなる人の数も徐々に減少し、エイズ孤児を取り巻く状況は変わっていきました。両親ふたりともエイズで亡くすのではなく、片親が残り、シングルマザーやシングルファザーに育てられる子どもを目にするようになりました。

片親で体調も不安定なため、家計は安定せず、教育費を払えずに留年や中退を余儀なくされる子どもたちがいます。エイズに対する差別意識はまだ残っており、親のエイズを理由に、近所の人や学校の友達から差別を受ける子どもたちがいます。他の子どもたちと同じような明るい未来を築けずにいます。エイズに影響を受ける子どもたちが未来を切り拓ける社会を作りたい。環境が変わってきても、わたしたちの思いは変わらずにエイズ孤児を支援する活動を続けています。

エイズ孤児とは

国際的にはエイズ孤児は、「片親または両親をエイズで失った18歳未満の子ども」と定義されています。世界には1780万人のエイズ孤児がおり、90%がアフリカに暮らしています。ケニアとウガンダにはそれぞれ100万人のエイズ孤児がいます。(UNICEF,2013)

現地の人々のちからを信じて－わたしたちが取り組んでいること

わたしたちの活動するケニア共和国とウガンダ共和国は、エイズに影響を受ける子どもや住民が多い国です。HIV陽性者の人口はそれぞれ100万人を超え、世界で上位10ヶ国に入ります。こうした国ではエイズによる死亡も多く報告されています。エイズで親を失った子どもやエイズに影響を受ける貧困家庭の子どもたちは、経済的困窮、家事負担、留年や中退、周囲からの差別や嫌がらせなど、学齢期に様々な課題に直面しています。プラスではこうした環境に置かれた子どもたちの健全な発達や将来のため、第一に保護者に働きかけ家庭環境を改善し、第二に子どもたちに働きかけ子ども自身の人生を切り拓く力を育てます。また、現地のパートナー団体や行政と協働し、困難を抱える子どもや家庭に対するサービスが地域で維持・発展できる仕組みができるよう取り組んでいます。

ウガンダではこれまでエイズに影響を受ける家庭を直接支援する事業で、シングルマザー22名、子どもたち約100名を支援してきました。ケニアではシングルマザー10名、子どもたち30名に支援を届けています。来年度は60家庭へ支援が届くよう、事業を拡大していく予定です。みなさまからのご支援に感謝申し上げます。

ケニアやウガンダの村の生活は、わたしたち日本人が想像するより、ずっと困難な状況にあります。そんな環境でも、ひとりひとりがより良く生きていくために、現地の人々のちからを信じ、それを高め・育てる支援を行っています。ときにはうまくいかないこともあります。根気よく諦めずに、現地の人々の声に耳を傾け、一緒に歩んでいきます。

家庭のちから

プラスでは2014年から家庭のちからを高める支援を続けています。困難な状況でも子どもたちを自分の手で育てたいという気持ちはどんな親も持っているものです。エイズや貧困に影響を受けるシングルマザーの経済力を高める支援を行っています。

子どものちから

プラスでは今年度より子どものちからを育てるカウンセリング事業を開始しました。教育を受けられるだけでなく、自分自身で未来を切り拓いていくためには、将来の計画や準備を早い段階で始め、困難な状況の中でも諦めない姿勢が必要です。

パートナー団体のちから

地域の課題を継続的に解決し、家庭に支援を届けるためには、現地の人々の手で行うことがより効果的です。こうしたパートナー団体のちからを育てていけるよう、事業づくりから積極的に参加を促します。





写真：ヴィアジェンコ職員（パートナー団体）

海外 事業

KENYA

インド洋を望む国際港を配し、東アフリカの経済の中心。国際援助も受けながら国としてエイズ対策に力を入れて取り組んでいる。HIV感染率は5.3%（2014年）で近年減少傾向にあるが、感染者160万人は世界で4番目に多い。



ケニアで新たなパートナー団体と歩き始めました

プラスは、現地の人々の自立を促進するため、現地NGOと協働して事業を計画・運営する「パートナー型」で事業を行っています。「パートナー型」では、現地での活動のほとんどをプラスと共に活動するパートナー団体（現地NGO）が担っています。ケニアでは、HIV陽性者が最も多く暮らすホマベイ郡で活動を展開するため、新たにパートナー団体を探すことになりました。プラスが大切にしている「エイズに影響を受ける子どもたちや家庭を支援する視点」、「現地で地道に活動を続ける視点」、「コミュニケーションの取りやすさ」などを基準に、2団体を新たなパートナー団体として選び、今年度から事業を進めています。

1団体目はビデップ（BIDEP: Bessa Integrated Development Programme）というHIV陽性者の支援を行っている団体で、ホマベイ郡の東部に団体の事務所があります。2団体目はヴィアジェンコ（VIAGENCO）という地域の貧困やエイズの課題に取り組む団体で、郡の西部に団体の事務所があります。

ホマベイ郡はどんなところ？

ケニアは日本の県にあたる「郡」が47つあります。ホマベイ郡はケニアの西部、ヴィクトリア湖沿いに位置しており、人口は約100万人です。郡の成人HIV感染率（15歳以上）は25%と高く、HIV陽性者（HIV/エイズと共に生きる人々）の人数が国で最も多い地域です。主要な産業は農業でメイズ等の穀類や豆類の栽培が盛んです。他には、家畜飼育やヴィクトリア湖での漁業、燃料のため薪や炭を売って生計を立てる家庭もあります。場所によっては半乾燥地域で、農業に向かない土地に暮らしている方もいらっしゃいます。地域の人口の60%が貧困下にあります。



写真：ホマベイの街とヴィクトリア湖

家庭の経済力を高めるため養鶏ビジネス支援を開始しました

ラチュオニヨ南準郡における養鶏による家庭の生計向上を通じたエイズ孤児支援事業

ホマベイ郡ラチュオニヨ南準郡では、ケニアの新たなパートナー団体であるビデップと、貧困下にあるHIV陽性のシングルマザー10人の家庭を対象に養鶏ビジネス支援を行っており、鶏舎の建設をスタートすることができました。この事業では各家庭が養鶏ビジネスで収入を得られるよう、鶏舎の建設・養鶏スキル研修の提供・エサ代などの運営費を支援しています。鶏舎建設は地域で用いられる技術を採用し、一部の作業でシングルマザーのみなさんにご協力をいただきました。簡単な修理が必要なおとき、本人たちで解決できるようにと、建設のプロセスに参加していただきました。

技術面では、地域の畜産局管理官の協力を得て、鶏舎のデザインにアドバイスをいただいた他、養鶏スキル研修・飼育モニタリングにも力を貸していただきます。ワクチンの調達は地域の獣医局の協力を得る予定です。この事業では、シングルマザーの子どもたち約40名が事業から裨益を受けています。



写真：ビデップの代表(パートナー団体)



事業に参加するヘリダさんは3人の子どもを一人で育てておられます。メイズを栽培する他、他の家庭の畑仕事を手伝い生計を立てています。ヘルスセンターではボランティアもしています。「鶏舎が建設されて、ヒナが届くのが待ち遠しい」と嬉しそうに話しておられました。

プラス代表の門田が2年ぶりに現地を訪問しました



2016年6月、プラス代表の門田が2年ぶりにケニアを訪問しました。新しいパートナー団体と事業を始めるにあたり、代表同士の顔合わせを行いました。団体立ち上げの背景やこれまでの活動について共有することができました。また、パートナー団体と進めている事業計画についてもフォローアップを行いました。

子どもの将来のため親と子どものスキルを高める事業を計画しています

ビタ準郡におけるエイズ孤児と保護者に対するライフプランニング支援事業

ホマベイ郡ビタ準郡では、ケニアの新たなパートナー団体であるヴィアジェンコと、子どもの発達や将来を考える親と子どものスキルを高めるための事業を計画しています。2016年4月には地域のHIV陽性者を含む、ひとり親の貧困家庭から聞き取りを行いました。保護者、子どもの両方からお話をお聞きしたところ、来年教育費にいくらかかるか分からない、子どもの成長や子どもとの関係に迷いを持つといった保護者の姿や、子どもの間では計画するスキルや問題に対応するスキルなどの課題があり、こうした課題を持つ家庭ほど子どもの留年が多いことが分かりました。

こうした課題を踏まえ、パートナー団体と協議した結果、これまでこの地域にはなかった、子どものキャリアスキル、保護者の養育スキルや家計スキルを高めるカウンセリングを提供することに決定しました。9月にはより詳細な聞き取りを行い、その後、地域の教育局、児童局、保健局等の行政職員をお呼びして、事業概要の共有やご意見をいただくためのステイクホルダー会議を実施することができました。この事業では地域の30人の保護者と30人の子どもたちがカウンセリングのサービスを受けられる予定です。



写真：地域の課題を整理するヴィアジェンコ職員

Googleフォームを活用したデータ入力

9月の聞き取りには、Googleフォームを使ったデータ入力を試験的に導入し、紙媒体に記録されたデータをパートナー団体スタッフがパソコンからオンライン入力しました。同時に複数人で行うことができ、通常の入力より時間短縮でき、タイムリーに結果が更新されるため、入力のモチベーションにもつながります。「大変だったが、この方法は面白いので継続してほしい」とパートナー団体から感想を得ることができました。



写真：空が広いビタ準郡の街並み

「支援がコミュニティに届いている」準区長さんから見た啓発事業

シヤヤ県ウクワラの地域住民によるHIV/エイズ母子感染予防啓発事業



2008年から2014年までシヤヤ県ウクワラの住民に対し、HIV母子感染予防の情報を提供し、妊婦検診や施設分娩を促す母子感染予防事業を行いました。事業終了後2年が経過し、事業の影響を知るため準区長さんとお会いしました。

準区長さんによると以前は住民はHIV検査や母子感染予防サービスを受けることを恐れていたそうです。プラスの啓発活動により住民の意識が変化し、必要な医療サービスを受診するようになったそうです。準区長さんからは「支援がコミュニティに届いている」という言葉をいただきました。啓発リーダーが地域の集会所でエイズの情報提供を続ける姿を今でも目にするとおっしゃっていました。

ケニアでは地方の病院の多くが平屋建てで廊下部分がオープンのため、どの部門をどの人が利用しているか周囲から見るすることができます。HIV陽性だと知られたり、間違われるのを気にして、サービス利用できないことがありました。また病院へ行く習慣がない方もおり、その結果、母子感染予防ができず、子どもにHIVが感染するケースが見られました。

HIV陽性者の中にはエイズ治療薬を取りに行くため、近くの病院ではなく、遠くの病院まで足を運ぶ方もいらっしゃったそうですが、エイズに対する正しい知識を持つことで、こうした状況が改善されました。

HIV母子感染予防とは

HIVは性行為による感染、血液感染、母子感染の3つの主な感染経路があります。母子感染は、子どもが胎内にいるときに胎盤を介して、出産時に産道内の血液や体液によって、母乳によって、起こる可能性があります。何も対策を取らない場合、20～30%の確率で母親から子どもに感染します。ケニアでは母子感染予防として、妊産婦検診を受け、エイズ治療薬を服用し、新生児にエイズ治療薬を飲ませ、母乳のみ（粉ミルクは使わない）で育児をすることが推奨されています（国によってガイドラインが異なります）。こうした情報は病院に行かないと手に入らない他、継続的な行動が求められるため、意識の変化が必要です。

地道に活動を続ける啓発リーダーの姿

当時の啓発リーダーにもお話を伺いました。活動を継続し、事業では回り切れなかった新しい地域グループや地域の集会に呼ばれ、啓発活動をすることもあります。事業終了後もHIVやエイズについて現地の講師に問い合わせる者もあり、自己研さんをし、知識を維持しています。エイズに関する知識は事業終了時点よりもさらに向上していました。事業による地域住民の変化を肌で感じ、今でも使命感を持って活動にあたられています。



写真：事業を支えた啓発リーダーと講師



写真：飲食品の販売ビジネスを行うシングルマザー



海外 事業

UGANDA

肥沃な土地で農業が主要産業。1980年代から国を挙げてエイズ対策に取り組んだことで感染率が大幅に減少したが、その後の内戦の影響を受け、2000年代後半には感染率が増加しており、現在は7.3%(2014年)である。

飲食物の販売ビジネスでシングルマザーの家計を支援しています

ルウェロ県におけるHIV陽性シングルマザーの収入向上を通じたエイズ孤児支援事業

ウガンダのルウェロ県ではパートナー団体のマルチパーパスと、HIV陽性のシングルマザーを対象に、飲食物の販売（カフェ）ビジネスによる家計支援を開始しました。ビジネスに関わる研修の提供、食品調理に必要な器材やテーブルやイスの供与を行いました。



ペーパービーズ制作を通じシングルマザーの収入向上を支援しています

HIV陽性シングルマザーの収入向上によるエイズ孤児支援事業

エイズで夫を亡くした女性（シングルマザー）を対象として、現地で手に入る材料のできるペーパービーズネックレスを制作し、家庭の収入を増加する支援を行っています。収入は子どもの教育費に使われる他、個人ビジネスへ投資することも期待されます。この事業では、シングルマザーの子どもたち約60名が事業から裨益を受けました。

事業から学んだこと

「収入と支出のバランスを取るの。優先順位を決め、不必要な出費を抑えるようにしています。」

そう語るのは事業に参加するスーザンさんです。スーザンさんは、エイズで亡くなった娘の子どもたちを育てています。パートナー団体のスタッフに寄り添われながら、期間、数量、品質が決まったビジネスを行うという経験が、彼女のビジネスやお金に対する考え方に少なからず影響したと考えています。スーザンさんと同じように支出を抑えるようにしていると語ったのは6人の子ども（うち3人は亡くなったきょうだいの子ども）を養うロビナさんです。「今までは浪費をしていたかもしれませんが、事業に参加して変わりました。収入があったときにまず使ってしまうのではなく、何が重要なものかを決め、支出を抑えることで、貯蓄ができるようになりました。」事業を通して、家計をやりくりする姿勢が少しずつ醸成されています。



写真：事業で裨益を受けるシングルマザーの子どもたち

共に活動してきたパートナー団体のジュリエットさんが永眠されました

2016年8月、これまでウガンダで共に活動してきたパートナー団体カユンガグループのジュリエットさんが亡くなりました。詳しい原因については分かっていませんが、肺に異常が見られ、入院をしたのですが、治療の甲斐なく、他界されました。ジュリエットさんは、カユンガグループの議長を務めており、代表のジョイさんと並び、カユンガグループをけん引する力強い女性でした。

カユンガグループとは2011年から関係を築き、英語の得意なジュリエットさんはプラスとの会議でも中心になって話し合いを進めてくれました。2013年に実施した養鶏事業では、理解力や計算能力の高いジュリエットさんが会計研修で他のメンバーを助けていました。業者とのやりとりや卵の販売などでも事業に多大な貢献をされ、現在でも地域の50名の子どもたちに教育支援を提供しています。

2016年4月にグループを訪問した際には、元気そうにしていたので、突然のことに大変なショックを受けています。いつも笑いの絶えないジュリエットさんの姿を忘れることができません。



代表のジョイさんにとっては家も近所で妹のような存在で、ジュリエットさんを亡くしてからしばらくは喪失感から抜けられなかったそうです。1ヶ月が過ぎ、畑に新たにトマトを植えるなど、ふさぎ込んでいるままではなく、前向きに生活し始めていると教えてくれました。

ご自身もHIV陽性でありながら地域の女性たちに手を差し伸べてきたジュリエットさんの思いを継ぎ、カユンガグループのメンバーと共に活動を続けていきたいと思ひます。

パートナー団体の声

ジョイさん(写真左)

カユンガグループ代表(ウガンダ)

プラスの事業は、家庭の経済力を高め、子どもが教育を受けられるようわたしたちのコミュニティを支えています。カユンガグループのキャパシティを向上させてくれたことも嬉しく思っています。今年はグループの代表の一人であるジュリエットが亡くなってしまい悲しい時期を過ごしましたが、まだコミュニティには支援を必要とするシングルマザーがおり、前を向いて活動を続けていきたいと思っています。日本の皆様に幸福が訪れますように。



サムソンさん(写真右)

ビデップ代表(ケニア)

今年からプラスと活動を始めました。彼らのアプローチはとても興味深く、わたしたちに対する眼差しやその優しい心に感謝しています。何をすればよいか、次の道筋を示してくれます。鶏舎が建設され、着実にその成果が目に見え、前に進んでいることを嬉しく思っています。わたしの団体とコミュニティを代表し感謝の意を表します。神の恵みがみなさまのもとにありますようお祈りしております。



ベンソンさん(写真右から2番目)

ヴィアジェンコ議長(ケニア)

地域の子どもたちは夢を持っていますが、どのようにそれを実現するか方法やステップを知りません。プラスの事業は最初から受益者を巻き込み、意見を取り入れようとする姿勢が見られます。事業効果の継続性が高いと評価できます。子どもたちがより良い未来を築けるようサポートをくださる日本の支援者の皆様に心より感謝いたします。こうした良い事業を拡大し支援を受けられる子どもが増えるよう更なるご寄付をお願いいたします。





国内 事業

JAPAN

エイズ孤児の問題を知っていただき、日本からできる課題解決の輪に加わっていただく活動をしています。皆さま一人お一人の温かいご支援とご協力がウガンダとケニアの活動を支えています。心より感謝を申し上げます。

日本からエイズ孤児の課題解決の輪を広げています

エイズ孤児の問題はプラスだけでは解決できません。子どもや保護者、そして地域が直面する課題を解決するために、日本では多くの方にエイズ孤児の問題を伝え、プラスと共に活動の輪に参加いただくための事業を実施しています。プラスの運営をボランティアやプロボノとして支えてくださる皆さま、活動を継続するために支えてくださるマンスリーサポーターや寄付者の皆様、そして企業の皆様との連携促進など様々な参加の輪を広げています。

数字でみる2016年の国内事業

169人

エイズ孤児問題を知る
イベントに参加

349人

マンスリー
サポーター・
寄付でご支援

63人

ボランティア・
プロボノで
活動に参加

13社

企業が支援・
協賛・協力で
活動を応援

エイズ孤児問題の啓発



モデルの堂珍敦子さんがゲスト、 チャリティパーティーを開催しました

12月1日の世界エイズデーに合わせ、2015年12月6日にチャリティパーティーを開催しました。トークセッションには、モデルの堂珍敦子さんをゲストにお迎えしました。5人のお子さんのお母さんである堂珍さんと代表の門田とのママトークでは、子育ての楽しさや苦勞についてもユーモアたっぷりにお話し頂きました。「何かを与える・与えられる関係ではなくて『シェア』する関係」という堂珍さんのチャリティの考え方は、来場者の方にも分かりやすく、一人ひとりがチャリティを実践するための刺激となりました。

世界エイズデーとは

毎年12月1日は「世界エイズデー」です。世界中の人々がHIVやエイズの問題に対して連帯し、HIVやエイズに影響を受ける人々への支援を表明し、エイズで亡くなられた方々を追悼する機会となります。健康に関する初めての世界的な記念日で、1988年に制定されました。赤いリボンデザインした「レッドリボン」は、「世界エイズデー」のシンボルとなっています。レッドリボンを身に着けることで、HIV/AIDSと共に生きる人々（People Living with HIV and AIDS）の連帯を促し、HIV/AIDSと共に生きる人々に偏見を持たず、差別せず、理解し、支援するための世界的な社会運動の象徴となります。

定例イベント「PLASRoom」を9回 開催、92名の方にご参加いただきました

HIV・エイズのこと、エイズ孤児の問題について、広く市民のみなさまに知っていただく機会を提供するために、月例のPLASRoomを開催しています。2016年度は9回開催することができ、合計92名の方にご参加いただきました。



参加者の声

エイズ孤児の問題が深刻な問題だと感じました。寄付やボランティアという言葉は日常生活でも目にします。それでも行動できずにいた自分を感じ、今日からエイズ孤児の支援に少しでも携わりたいと思いました。

エイズの問題や、プラスがどのように支援を届けているのかよく理解できました。特に、現地の住民たちが自立できるような取り組みをされているのが印象的でした。



スタッフの声

プラスのイベントの魅力は、「じっくりと話を聞くことができる」こと。講演だけでなく質疑や交流の時間があり、現場で活動するスタッフから、活動にかける思いや苦勞をしっかりと聞くことができます。アットホームな雰囲気なので、初めての方もお勧めですよ。

今後は、日頃活動に関わって下さっている方が参加し、参加者の方もスタッフも一緒になって楽しめるようなイベントの開催にも力を入れていきたいと思っています。

(国内事業担当 下久禰 愛)

市民参加

ボランティアのみなさまの手によって支えられる活動



イベントや物販で活躍！ボランティアの皆さま

2015年11月、3回目のボランティア・デイを開催し、物販商品へのタグ付けなどのボランティア作業を共に行い、プラスの活動をご説明しました。ウガンダのHIV陽性のシングルマザーたちが手作りしたペーパービーズのネックレス1本1本に丁寧にタグ付けをしていただきました。ネックレスに詰められたシングルマザーたちの想いや暮らし、そして彼女たちとプラスが進めてきた事業内容について、プラスインターン生よりご紹介。真剣なまなざしで聞いて下さりました。



学生から社会人の方まで幅広くご参加いただきました。作業の前にインターンよりプラスの活動をご紹介しました。

今年で3年目！プラスのボランティアチーム「PLAS-tic Labo」の活動

2013年7月にスタートした社会人ボランティアチーム「PLAS-tic Labo (プラスチックラボ)」。休日や平日夜にチームで集まり、チャリティ商品の販売や外部イベントへの出展、ウェブショップの運営など様々な活動を続けています。運営を率いるのはプラス活動歴8年のボランティアスタッフ。SEやデザイナー、会社員、団体職員など多様なバックグラウンドの皆さんの企画力と実行力、熱い想いでプラスの活動を広げていただいています！



PLAS-tic Laboが企画・運営するチャリティウェブショップでは、ウガンダのシングルマザーたちが手作りした商品をお届けいたします。

[プラス チャリティウェブショップ](#) 検索

以前から国際協力に関心があり、これからも何らかの形でこの分野に関わっていきたいという気持ちがあり、プラスの活動にボランティアとして参加を始めました。PLAS-tic Laboの活動は自分のできる範囲で無理なく参加することができ、日々いろいろなことを学ばせていただいています！



高橋 直樹さん

2012年からプラスのボランティアとしてイベントや物販プロジェクトを中心に活躍。チャリティパーティーでは毎年物販ブースのリーダーを務める。



野村 とし子さん

2009年からプラスのボランティアスタッフとしてウェブ制作や物販を中心に活躍。普段はSEとして働きながら、PLAS-tic Laboの統括を務める。

仕事では経験できない多様な活動と、多様な人に出会えること。それがプラスでボランティアを続ける理由です。私にとってプラスの活動は、仕事などの垣根を越えてフラットに話せる場でもあります。ボランティアの関わり方はさまざまです。在宅でできることもあれば、何気ないおしゃべりからアイデアが生まれることも。ぜひ気軽に参加してみませんか？

プラスの活動の要、インターンの活躍



外部でのイベント出展では明るく元気な接客でプラスのブースを盛り上げています。

プラスは2010年から35名のインターンが国内外の活動を支えてきました。2016年度は8名が日本事務局で活動。イベント企画運営、著名人へのチャリティオークション協力依頼活動、海外事業の調査分析など、職員の右腕・即戦力として支えています。職員と同じように1つのプロジェクトを担当し、時には難しい判断や壁にぶつかりながらも大きく成長し、インターン卒業後は様々なフィールドで活躍する姿に支援者やボランティアの皆様からも共感・応援をいただいています。

直接エイズ孤児に接することはありませんが、間接的にも力になれていると感じ、非常に充実していました。自ら「やりたい」と手を挙げ、更にそれを受け入れてくれる環境があるため自分の成長にも大きく繋がりました。

(渡辺 朱音さん)



データベースを活用しながらプロジェクトを一人で担当したり社会人経験がある自分にとってもやりがいがある経験でした。プラスの活動はメリハリがありながらもアットホームで、良いと思ったことを声にして実現していく姿勢がとても新鮮でした。

(志賀 いずもさん)

日本社会への知識・経験の共有と還元

複雑化する社会の中で、NPOの役割が一層期待されていますが、NPO間の学び合い、日本社会への知識・経験の共有・還元をすることで、様々な社会課題に取り組まれる組織や人々の一助になればと考え、プラスの活動を通して得た知見を積極的に社会に還元させています。

講演実績

- ・公益財団法人エイズ予防財団 「業務効率化と多様な働き方で組織課題を解決」
- ・グンゼ高分子株式会社 「ウガンダ・ケニアのエイズ問題とプラスの活動」
- ・一橋大学国際・公共政策大学院 「NGOの現場から-限られたリソースで成果をあげるには-その課題と解決策」 (デロイト トーマツ コンサルティング合同会社様にご依頼いただき講演が実現しました)
- ・ 武蔵野大学 「NGO論」

プラスではこれまで大学や援助機関、企業、修学旅行や総合学習、非営利組織での国際協力セミナー等で講演を行ってきました。様々なご要望に合わせて、大学などの学校から企業、自治体、学生サークル、地域活動グループまで、ご関心のある方ならどなたでもご依頼いただけます。私たちがお話できる場がありましたらぜひお呼びください。

講演にご興味のある方、
お問い合わせはこちらから



エイズ孤児 講演活動 検索

<http://www.plas-aids.org/activities/kohen>

参加者の声

国際協力分野の最前線で働く方のお話を聞くことができ貴重な体験となりました。これからも自分なりの方法で国際協力に関わっていきたいと思いました。
(男性/20代)

これまで遠い存在だったアフリカのこと、エイズ孤児のことを身近に感じることができました。私にできることから始めていきます。(女性/40代)

ご支援いただいた企業・団体・著名人の皆様

多くの法人・著名人の皆様からご支援・ご協力いただきました。心より御礼申し上げます。

ご寄付・ご協賛・その他のご支援

- キューピー株式会社
- グンゼ株式会社
- 株式会社GME
- 株式会社セールスフォース・ドットコム
- 株式会社良品計画
- 株式会社イオンフォレスト
- 株式会社アイデアインターナショナル
- 株式会社シータス&ゼネラルプレス
- 株式会社スクーナ
- デロイト トーマツ コンサルティング合同会社
- 株式会社ナチュラルプランツ
- ヤフー株式会社
- 一般社団法人PARACUP
- 株式会社ラッシュュジャパン

助成金

- 特定非営利活動法人アユス仏教国際協力ネットワーク（NGO組織強化支援事業助成金）
- 宗教法人日蓮宗（あんのん基金）
- 公益財団法人日本国際協力財団（国際協力NPO助成（一般型））
- 公益財団法人庭野平和財団（公募助成）
- 一般財団法人まちづくり地球市民財団（国際協力助成）
- 株式会社ラッシュュジャパン（チャリティバンク）
- 外務省主催NGO海外スタディ・プログラム（国際協力NGOセンター）

のべ57名の著名人の方にご協力いただきました

世界エイズデー／世界エイズ孤児デーチャリティオークション

世界エイズデー、世界エイズ孤児デーに合わせ、著名人の皆様にご協力をいただき、チャリティオークションを実施しています。世界エイズデーキャンペーンでは29名の著名人のみなさま、世界エイズ孤児デーキャンペーンでは、28名の著名人のみなさまにご協力いただき、302万5千円の寄付をケニア・ウガンダのエイズ孤児支援活動に役立てることができました。

広末涼子さん

「沢山の人が、このキャンペーンに参加し、一人でも多くの子どもの笑顔につながってくれるとうれしいです。子どもたちにHappyを！」



FLOWさん

すぐに何か大きな事は出来ないけれど、最低限僕らにできる事があります。エイズを知る事と忘れない事。エイズの怖さを、防げるという事を、誤解している事を知っていきましょう。一つ一つ、ひとりじゃなくみんなで！



大沢あかねさん

エイズ孤児、世界の子供たちが直面する問題の改善に取り組んでいるこの活動に、子をもつ一人の母親として、微力ながらも協力させて頂けたらと思います。また、HIV/AIDSについて、正しい知識と関心をもつことの大切さを、このキャンペーンを通して、一人でも多くの方に伝え続けて欲しいと思います。

ご協力いただいた著名人の皆様（順不同）

FLOWさん、SEKAI NO OWARIさん、つるの剛士さん、カナヘイさん、安田菜津紀さん、小倉優子さん、渡辺真理さん、岸田護さん、北見けんいちさん、MINMIさん、杉山愛さん、蛭子能収さん、田中雅美さん、植田まさしさん、澤穂希さん、有森裕子さん、松岡修造さん、高橋陽一さん、リリー・フランキーさん、ちばてつやさん、東尾理子さん、広末涼子さん、永井謙佑さん、土屋アンナさん、ルー大柴さん、一ツ山チエさん、紺野美沙子さん、いがらしゆみこさん、安達祐実さん、北見けんいちさん、有森裕子さん、しげの秀一さん、大沢あかねさん、村上龍さん、寛美和子さん、野口健さん、高橋尚子さん、堂珍敦子さん、芝田じゅんさん

受賞のご報告

これまでの活動を評価頂き、人間力大賞など多くの賞を受賞しました

プラスのこれまでの活動の成果を評価していただき、各賞を受賞することができました。日頃よりご支援いただいている皆さまのご協力あっての受賞に、心より御礼申し上げます。

- 第一回NGO組織強化大賞「働き方改善部門賞」「大賞」受賞（国際協力NGOセンター（JANIC）と立正佼成会による共催）
- 人間力大賞「準グランプリ」「外務大臣奨励賞」（代表門田のこれまでの活動が評価され受賞）（日本青年会議所主催）
- 第四回日経ソーシャルイニシアチブ大賞ファイナリスト選出（日本経済新聞社主催）

第一回NGO組織強化大賞受賞



1月19日、NGOの優れた組織強化の取り組みを表彰するNGO組織強化大賞にてプラスが大賞を受賞しました。経営戦略、働き方改善、女性の活躍など4部門からノミネートされた団体がそれぞれの取り組みをプレゼンし、101名の来場者と審査員の投票で大賞に選ばれました。プラスは、代表・事務局長2人の産育休をきっかけに取り組んできた業務効率化や多様な働き方を実現した「働き方改善」を発表。取り組みの有効性だけでなく、多様なバックグラウンドの職員が生き生きと働いているこ

で働くことは楽しい」という明るい前向きなNGOメッセージとして内外に発信した点に評価が集まりました。私たちが目指す組織強化の先には、プラスがミッションを果たしエイズ孤児の問題解決につなげることを見据えています。プラスに関わるすべての人が、それぞれの強みや将来ビジョンを尊重され、目標達成に向かって生き生きと活動できる、そんな組織を実現していきます。（事務局長理事 小島 美緒）

人間力大賞「準グランプリ」「外務大臣奨励賞」（代表門田の受賞）

9月17日大正大学にて「青年版国民栄誉賞～第30回人間力大賞授賞式典」が開催されました。皆様に応援いただき、「準グランプリ」と「外務大臣奨励賞」をW受賞することができました。この賞は、個人に贈られる賞ですが、これまでのプラスの活動は、何一つ私一人で実現できることはありませんでした。すべての活動が、スタッフをはじめ、ボランティアや寄付者のみなさま、様々な形で応援してくださる個人や企業のみならず、現地のパートナーのみならず、多くの方の支えや努力があってこそ。ですから、この賞は、プラスに関わる皆様へ贈られた賞なのです。心より感謝申し上げます。（代表理事 門田 瑠衣子）



日経ソーシャルイニシアチブ大賞国際部門賞ファイナリストに3年連続で選出！

6月27日、第四回日経ソーシャルイニシアチブ大賞授賞式が開催され、プラスは3年連続で国際部門賞ファイナリストに選ばれました。事業の社会貢献性に加え、事業モデルの新規性や革新性、市場性、発展性、拡張性の観点から審査される本賞。プラスは、テクノロジーを活用した事業展開やインパクト測定に向けた取り組みや、柔軟で多様な働き方を実現した組織強化の取り組みが高く評価されました。



活動計算書

2015年10月1日 ～ 2016年9月30日まで

(単位：円)

科 目	金 額		
I 経常収益			
1. 受取会費			
正会員受取会費	6,000	6,000	
2. 受取寄附金			
受取寄附金	8,906,373	8,906,373	
3. 受取助成金等			
受取民間助成金	5,389,929	5,389,929	
4. 事業収益			
普及啓発事業収益	579,266	579,266	
5. その他収益			
受取利息	1,105	1,105	
経常収益計			14,882,673
II 経常費用			
1. 事業費			
(1) 人件費			
給料手当	5,600,648		
人件費計	5,600,648		
(2) その他経費			
会議費	42,827		
旅費交通費	1,760,389		
通信運搬費	698,354		
消耗品費	631,307		
賃借料	270,000		
業務委託費	3,419,739		
支払手数料	102,053		
印刷製本費	120,818		
研修費	198,231		
保険料	21,960		
諸会費	2,262		
雑費	12,947		
その他経費計	7,280,887		
事業費計		12,881,535	
2. 管理費			
(1) 人件費			
給料手当	718,124		
法定福利費	724,207		
人件費計	1,442,331		
(2) その他経費			
会議費	10,184		
旅費交通費	62,056		
水道光熱費	41,092		
通信運搬費	105,868		
消耗品費	146,473		
支払手数料	194,897		
地代家賃	1,375,073		
印刷製本費	7,602		
研修費	1,000		
保険料	164,893		
諸会費	75,000		
雑費	△ 32,993		
その他経費計	2,151,145		
管理費計		3,593,476	
経常費用計			16,475,011
当期経常増減額			△ 1,592,338
税引前当期正味財産増減額			△ 1,592,338
法人税、住民税及び事業税			0
前期繰越正味財産額			9,077,857
次期繰越正味財産額			7,485,519

監査報告書

特定非営利活動法人エイズ孤児支援 NGO・PLAS

代表理事 岡田 瑠衣子様

2016年12月15日

監事 藤本 俊明

私は、特定非営利活動促進法第18条の規定に基づき、特定非営利活動法人エイズ孤児支援 NGO・PLAS の2015年度（2015年10月1日～2016年9月30日）の業務及び会計の状況について監査を実施いたしました。

監査の方法は、重要な会議の議事録その他の重要資料を閲覧するほか理事から事業の報告を聴取し、また財産の状況については証拠書類の閲覧、照合、質問等を行いました。

監査の結果、法人の業務の執行に関しては法令及び定款に基づき適正に執行され、会計処理は NPO 法人会計基準及び一般に公正妥当と認められる会計の方法によって適正に処理されているものと認められた。

以上

藤本 俊明

特定非営利活動法人 エイズ孤児支援NGO・PLAS

〒110-0005 東京都台東区上野5-3-4 クリエイティブOne秋葉原ビル7F

TEL:03-6803-0791 E-MAIL:info@plas-aids.org

www.plas-aids.org/